愛知県 小中学生向け多文化共生理解教材

指導案

愛知県 小中学生向け多文化共生理解教材 「みんなでつくろう 多分化共生社会」指導案

この指導案は小中学生向け多文化共生理解教材 「みんなでつくろう 多分化共生社会」を学校現場で活用する際の参考としていただくために作成した。以下、本教材の趣旨・目標、対象とする児童生徒や指導上のポイントについてまとめる。

(1) 教材の趣旨・目標

愛知県の小中学校には、多くの外国につながる児童生徒が在籍している。文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（令和３年度)」によると、都道府県別では、愛知県の「日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の在籍人数」が全国で１位の 10,749 人で、２位の神奈川県(5,261 人)の倍以上である。これらの児童生徒のうち、1 万人以上が小中学校等に在籍している。

この教材において、「多文化共生」を抽象的な概念として学習はしない。むしろ、実在する外国につながる登場人物の体験談の中から、児童生徒にとって身近な事例やエピソードを数多く取り上げることで、「こういう時にこう感じるんだな」と気付いてもらい、共感しながら学んでいくことを狙っている。「多文化共生」を、相手を“知る”、相手と“共感する”ことを通して、「様々な背景を持つ人と、仲良く社会づくりに取り組むこと」として提案している。

愛知県に外国につながる児童生徒が多く学校に在籍するということは、若いうちから様々なバックグラウンドを持つ人と仲良く協力し合い、お互いのできる・できないことを考えながら成長できることにつながると考えられる。作成に関わった者一同は、この教材が、愛知県の小中学校に在籍している全ての児童生徒が「多文化共生」について考えるきっかけになることを願っている。

(2) 対象者

小学校 5～6 年生、中学校 1 年生あたりが最も適切であると考えられる。人と人の「違い」に気付き、興味を持ち、それに伴う課題を理解し自ら解決策を考える適切な年齢であると思われる。

(3)指導上のポイント

ア 「外国人は…」や「日本人は…」という言い方を避ける

上記に「日本語指導が必要な外国籍の児童生徒」の数字を挙げたが、日本国籍を持っていながら、ある時点まで海外に滞在していたことから日本語が母語のように話せない児童生徒も多くいる。一方、外国籍でありながら日本生まれ日本育ちで、日本語や日本の生活に対して一切課題を抱えていない児童生徒も一定数いる。こうしたことからも、「日本人」、「外国人」と一括りにはできないことが分かる。

そのため、この教材では「外国人」や「日本人」という表現を、その区別が明確に必要な場面以外には使っておらず、本人が日本国籍を持っていながら、両親のどちらかが外国出身である人や、外国で生まれ育ち、大きくなってから日本で暮らしている人などを「外国につながる人」と表現している。そのため、可能な限り、この教材を使っているときに「外国人は…」や「日本人は…」という言い方を避けられたい。

イ　外国につながる児童生徒のアイデンティティや気持ちに十分配慮する

外国につながる児童生徒の中には、日本語が堪能で教室活動にリーダーシップを持って活動できる者もいれば、日本語教育に対する支援が必要な者もいる。また、外国につながることに対する自身のアイデンティティがしっかりできており、自身のルーツについて語りたい者もいれば、「外国人なの？」と言われるのが恥ずかしいと思う者もいる。そのために、この教材を使っているときに特定の児童生徒に「～さんはどうだったの？」と直接聞いたり、「外国につながる人」と特定したりすることは避けたい。むしろ、この教材で児童生徒が、登場人物の話を他人事として捉えるのではなく、自分の身近にいる人の気持ちかもしれないと気付き、共感を持ち、接し方を考えることを願いたい。

ウ　「外国人」＝「支援の対象」として位置づけない

本教材では、外国につながる人を支援の対象に位置付けることを一切目的としていない。前述のとおり、愛知県には、外国につながる人が多く暮らしており、共に社会を作っていくことが当たり前なこととして児童生徒が考えていけるよう、留意されたい。

2023 年 3 月

愛知県 小中学生向け多文化共生理解教材 作成者一同

1 章：文化、異文化、多文化共生とは？

1　テーマ（キーワード）

文化　異文化　異文化間コミュニケーション、多文化共生、外国籍住民

2　テーマの背景

・教材全体のテーマである「多文化共生」について考えるため、「多文化共生」とはどういうことを指しているかについて予め理解する必要がある。様々な「文化」を持つ人が「共に生きる」ことによって生じる現象や課題を意識することによって、多文化共生社会を身近に実感できると考えられる。

・「共生」という言葉は 1980 年代に日本で広く使われるようになったが、本来「自然との共生」というように、持続可能性や環境意識を高めるために用いられてきた。同じように「多文化共生」の意味を理解することによって、「多文化社会」に対する意識や共感を養うことが可能になると考えられる。

3　留意点

・外国につながる児童生徒がいる学級では、実際に異文化コミュニケーションにより複雑な感情を持っている児童生徒がいる場合がある。そのような児童生徒が意見を出しやすい雰囲気づくりをするなどの配慮をし、学級内の関係づくりや深い学びにつなげたい。

4　ねらい

・人はそれぞれの「文化」を持っており、「当たり前」だと感じることが異なる場合があることを知る。

・異文化コミュニケーションで生じる「当たり前」の「ずれ」を追体験し、よりよい解決策について考える。

・日本に住む外国につながる人、障がいのある人などの暮らしについて考え、身近な生活の中に多文化共生の手がかりを探す。

・多文化共生を進めるために大切なことを考え、ペアで話し合うことで、これからの多文化共生社会のあり方を考えるきっかけとする。

5　評価の観点・評価規準

① 知識・技能	② 思考力・判断力・表現力など	③ 学びに向かう力・人間性など
・自分たちが「当たり前」と感じている文化が当たり前ではないことに気付き、世界には多様な文化背景があることを理解する。	・異なる文化背景を持つ人々が共に暮らし、交流する多文化共生社会を築くために必要なことを考え、提案できる。	・学級の児童生徒と共に意欲的にこれからの多文化共生社会のあり方を考えようとしている。

6　評価方法

・教材冊子への記入状況、ペアワークの様子や振り返りから、評価の観点にそって評価する。

7　教材・教具

・教材冊子

8　授業展開（1時間で行う例）

時間	児童生徒の学習活動	教師の指導上の留意点
導入 10分	1. 「文化」とは？ ・冊子 p.1 の文章及びイラスト（芸術～宗教）から、「文化」とは何かを知る。 ・自分の文化について具体的に考え、p.1 の表（生まれた場所～得意なこと）に記入する。	・自分が「当たり前」と考えることを具体的にイメージできるように、例を示すなどの支援をする。
展開 30分	2. 「異文化コミュニケーション」を考えてみよう！ ペアワーク① 「当たり前」の「ずれ」を知ろう！ ・冊子 p.2 のマンガを読み、内容を理解する。 ・「当たり前」の「ずれ」についての考えを p.2 に書き、ペアで話し合う。	・マンガの内容を理解しやすいように、マンガ内の登場人物について説明する。 ・ペアで話し合ったことをクラスで共有できるようにする。
	3. 「多文化共生」とは？ ・冊子 p.3 のグラフから、日本に住んでいる外国人の人口を知る。 ペアワーク② 「日本人」とは？「外国人」とは？ ・「日本人」と「外国人」をそれぞれどう考えているか、ペアで意見交換をする。 ・冊子 p.3 の文章及びイラストを見て、「日本人」と「外国人」をどう考えたらいいかについて、ペアで話し合う。	・イラストの意図していることを考えさせたり、イラストを見て感じることを自由に話させたりして、自分との関わりを考えられるように支援する。
	4. 多文化共生を進めるには、みんなの協力が必要！ ペアワーク③ 多文化共生のために大切なことを話そう！ ・冊子 p.4 のマンガを読み、内容を理解する。 ・多文化共生を進めるために、自分が今からできることを考え、ペアで話し合う。	・自分ごととして考えられるように、身近な町の様子を写真で紹介したり、教師の体験したエピソードの紹介を加えたりしてもよい。
まとめ 5分	5. 本日の振り返り ・冊子の振り返り欄に記入する。 ・今回の授業に参加して、驚いたことや疑問に思ったことを各自で記述する。	・授業後に各自の振り返り内容を、クラス掲示などで共有する。

※備考：ペアワークはグループワークにすることも考えられる。

発展的な調べ学習や発表を加えるなど、2時間以上で展開することもできる。

２章：移住するとは？

1　テーマ（キーワード）

移住、日系人、外国で働く理由

2　テーマの背景

・日本に住む外国につながる人は現在急増している。しかし、歴史の流れを見ると「生活のために海外に移住する」という現象は特に新しい流れではなく、世界情勢や経済の変動などによって少なくとも 19 世紀に遡る。日本人であった先祖が、かつて海外へ移住したからこそ現在日本にいる「日系人」と呼ばれる人の存在もある。また、第二次世界大戦の前後に台湾、朝鮮などから日本へ移住した人の子孫の多くも現在日本に住み続けている。現在の「外国につながる人の増加」を歴史の流れにおける「意義」を理解することが大切だと考えられる。

・また「日本は現在経済的に安定しているから外国人はここに住みたい」という理解と同時に「日本が人手不足だから、外国につながる人たちによって様々な場面で助けられている」という意識を持つことも多文化共生のために大切だと考えられる。また、移住した人の気持ちに対する共感を育てることができたら、差別の解消につながると考えられる。

3　留意点

・学級によっては、実際に本人や家族が移住を経験して、テーマについて複雑な感情を持っている児童生徒がいる場合がある。そのような児童生徒が意見を出しやすい雰囲気づくりをするなどの配慮をし、学級内の関係づくりや深い学びにつなげたい。

4　ねらい

・「移住」の意味を知り、過去と現在の日本との関わりを共感的に理解する。

・これからの日本と「移住」との関わりを考える。

・移住の目的や移住する人の気持ちを想像して考える。

5　評価の観点・評価規準

① 知識・技能	② 思考力・判断力・表現力など	③ 学びに向かう力・人間性など
・「移住」の意味を知り、過去と現在の日本との関わりを理解している。	・移住の目的や移住する人の気持ちを想像して考えることができる。	・学級の児童生徒と共に「移住」について共感的に理解しようとしている。

6　評価方法

・教材冊子への記入状況、ペアワークの様子や振り返りから、評価の観点にそって評価する。

7　教材・教具：

・教材冊子

8　授業展開（１時間で行う例）

時間	児童生徒の学習活動	教師の指導上の留意点
導入 10 分	1. 移住することの意味 ・冊子 p.5 の文章及びイラストから、「移住」とは何かを知り、具体的にどのような人が日本に移住しているのかを理解する。 ・移住して日本で働く外国につながる人が日本経済の支えとなっていることを知る。	・近所で働いている外国につながる人の方がいないか考えさせたり、教師から紹介したりして、身近なこととととらえさせる。
展開 30 分	2. 日本人が諸外国に「移住」した時代もあった ペアワーク① ・日本人がブラジルに移住していた時の生活を想像しよう！ ・冊子 p.6 のマンガを読み、内容を理解する。 ・日本人がブラジルに移住していた時の生活を想像して、ペアで話し合う。	・マンガの内容を理解しやすいように、マンガ内の登場人物について説明する。 ・ペアで話し合ったことをクラスで共有できるようにする。
	3. 海外に移住した人の気持ちを考えてみよう ペアワーク② 移住した時の気持ちを想像しよう！ ・冊子 p.7 のそれぞれの登場人物の言葉から、移住した時の気持ちを想像する。 ・自分がその立場であったらどのような気持ちになるかを考え、p.7 の表に書き、ペアで話し合う。	・それぞれの登場人物の言葉を理解しやすいように、人物について補足説明する。
	4. 移住する人は、みんな夢を持っている ペアワーク③ 移住の目的と働くことについて考えよう！ ・冊子 p.8 のマンガを読み、内容を理解する。 ・移住の目的と働くことについて考え、ペアで話し合う。	・自分ごととして捉えられるように、将来日本からの移住が増えるのか、自分は移住したいか、何のために働きたいかなど、児童生徒の様子を見ながら考えさせる。
まとめ 5 分	5. 本日の振り返り ・冊子の振り返り欄に記入する。 ・今回の授業に参加して、驚いたことや疑問に思ったことを各自で記述する。	・授業後に各自の振り返り内容を、クラス掲示などで共有する。

3章：食は心のふるさと

1　テーマ（キーワード）

食文化、ベトナム料理、ネパール料理、ペルー料理、心のふるさと

2　テーマの背景

・この教材を作成するのにあたり、多くの外国につながる人とインタビューを実施したが、複数人から「子どもの時自国（自文化）の料理を食べていたら相手に嫌なコメントをされ、悔しかったからそれからその料理を食べなくなった」という経験談を聞いた。自国や家族を離れた時に好きな料理を食べられることは心の支えになることを理解してもらうことが大切だと考えられる。

・また、多文化共生社会において発展する豊かな食文化に対する認識も大切だと考えられる。

3　留意点

・外国につながる児童生徒がいる学級では、実際に食文化の違いにより様々な経験をしている児童生徒がいる場合がある。そのような児童生徒が意見を出しやすい雰囲気づくりをするなどの配慮をし、学級内の関係づくりや深い学びにつなげたい。

4　ねらい

・自分が考える「食文化」とは異なる「食文化」があることを理解する。

・外国につながる人の故郷の料理の食材や調理方法の情報を基に、実際に調理を体験し、多文化の食事を楽しむ。

・身近な地域にある多文化の料理店や食材店を検索して情報を得る。

・多文化の食事の様子を見て、相手の立場になって反応することの大切さについて考える。

5　評価の観点・評価規準

① 知識・技能	② 思考力・判断力・表現力など	③ 学びに向かう力・人間性など
・自分が考える「食文化」とは異なる「食文化」があることを理解している。 ・身近な地域にある多文化の料理店や食材店を検索して情報を得ることができる。	・外国につながる人の故郷の料理の食材や調理方法を基に、実際に調理を体験し、多文化の食事を楽しむことができる。	・学級の児童生徒と共に、多文化の食事の様子を見た時に、相手の立場になって反応することの大切さを考えている。

6　評価方法

・教材冊子への記入状況、ペアワークの様子や振り返りから、評価の観点にそって評価する。

7　教材・教具

・教材冊子、タブレット端末

8　授業展開（1時間で行う例）

時間	児童生徒の学習活動	教師の指導上の留意点
導入 5分	0. 自分の一番食べたい食べ物は何でしょうか ・自分の一番食べたい食べ物は何か考える。 ・学校にお弁当を持ってくる時には、何を持ってきたいかを考えて、学級で発表しあう。	・テーマを自分ごととしてとらえさせるとともに、自分の食習慣・食文化への気付きを促す。
展開 35分	1. どの人も自分の国や地域の料理を食べるとホッとする ペアワーク① 一番食べたいものを食べている時に、他人に「嫌だ」と言われたら、どう感じますか？ ・冊子 p.9 のマンガを読み、内容を理解する。 ・自分がそんさんの立場だったらどう感じるか考え、ペアで話し合う。	・マンガの内容を理解しやすいように、マンガ内の登場人物について説明する。 ・ペアで話し合ったことをクラスで共有できるようにする。
	2. 多文化ご飯を作って食べよう！ ペアワーク② どの多文化料理を作ってみたいかな？ ・冊子 p.10-11 のベトナム料理、ネパール料理、ペルー料理の食材と調理方法を読む。 ・調理動画を視聴して、作り方を知る。 ・自分がどの料理を作りたいか、その理由とともに考えて、ペアで意見交換する。	・手に入る食材があれば実物を紹介する。 ・各家庭での調理ができれば、後日、その調理・食事の様子を共有する。 ・家庭科の授業との連携による調理実習や、地域連携の交流行事につなげる。
	3. 愛知県の多文化料理を検索しよう！ ペアワーク③ 身近な多文化料理を知ろう！ ・タブレット端末を活用して、身近な地域にある多文化の料理店や食材店を検索する。店舗の種類や数など、各自の興味に基づいて調査する。 ・ペアで協力して行い、学級で結果を話し合う。	・タブレット端末の使い方については別途指導する。 ・各自が興味のある国や地域の料理について調べられるように支援する。 ・必要に応じて教師の検索結果を例示する。
	4. 相手が食べているものは、どんな食べ物かな？ ・冊子 p.12 のイラストを基に、自分が好きではないものを食べている人を見た時、相手の立場になってどんな反応が「やさしい」のかを考える。	・「レシピを教えて」、「食べられるようになってみたい」などのコメントを「やさしい」反応として、「臭い！」、「気持ち悪い！」などのコメントを「やめた方がいい」反応として例示する。
まとめ 5分	5. 本日の振り返り ・冊子の振り返り欄に記入する。 ・今回の授業に参加して、驚いたことや疑問に思ったことを各自で記述する。	・授業後に各自の振り返り内容を、クラス掲示などで共有する。

4章：多文化共生のためのコミュニケーションを考えよう

1　テーマ（キーワード）

やさしい日本語、共通言語、第一言語、母語

2　テーマの背景

・「外国人＝英語を話す」という概念が一般論として普及しているが、現在日本に生活している外国人（外国につながる人）の多くは日本語をある程度でき、中には日本生まれ、日本育ちで、ほぼ母語レベルで日本語能力を身につけている人も少なくない。外国につながる人には「やさしく」日本語で話してもいい、という認識を普及することが大切だと考えられる。

3　留意点

・学級によっては、実際に本人や家族が多言語を話し、日本語が第一言語（母語）ではない児童生徒がいる場合がある。そのような児童生徒に配慮することを前提として、実際に日本語の使用について困ったことや逆にうれしかったことなどを聞き取っておき、学級で共有することが考えられる。建設的な意見を出しやすい雰囲気のもとで、学級内の関係づくりや深い学びにつなげたい。

・日本に移住して初めて日本語を学ぶ児童生徒には日本語学習に対する励ましの言葉や褒め言葉をかけることは大切だが、日本生まれ、日本育ちの外国につながる児童生徒が「日本語上手だね」と言われると恥ずかしい思いをすることがある。顔や名前などをもとに推定する日本語能力のレベルを決めつけないように留意したい。

4　ねらい

・「やさしい日本語」の使い方を理解し、表現を工夫する。

・「違う」という言葉の伝わり方と相手に与える影響を知り、適切な表現方法を考える。

・外国につながる人と適切なコミュニケーションを図るために、日本語を話す時に工夫が必要であることに気付く。

5　評価の観点・評価規準

① 知識・技能	② 思考力・判断力・表現力など	③ 学びに向かう力・人間性など
・「やさしい日本語」の使い方を理解し、表現を工夫することができる。	・「違う」という言葉の伝わり方と相手に与える影響を知り、適切な表現方法を考えることができる。	・外国につながる人と適切なコミュニケーションを図るために、日本語を話す時に工夫しようとしている。

6　評価方法

・教材冊子への記入状況、ペアワークの様子や振り返りから、評価の観点にそって評価する。

7　教材・教具

・教材冊子

8　授業展開（１時間で行う例）

時間	児童生徒の学習活動	教師の指導上の留意点
導入 10 分	1.日本語で話しかけてみよう ・冊子 p.13 の文章から、愛知県内に住んでいる外国人住民の日本語の能力の実態を読み取る。 ・「やさしい日本語」はどのようなものか理解する。 ・「難しい日本語」から「やさしい日本語」への言い換えのポイントを知り、冊子 p.13 の表を完成させる。	・「やさしい日本語」について、身近な場面（衣食住や学校生活）をいくつか示して考えさせる。
展開 30 分	2.「違う」という言葉の意味を考えよう ・冊子 p.14 の文章及びイラストを基に、「違う」という言葉を使う場面と意味をペアで考える。 ペアワーク① ・「違う」と言われると、どんな気持ちになりますか？ ・相手に「違う」と言いたくなったら、どうしたらいいと思いますか？	・ペアで考えたことをクラスで共有できるようにする。 ・「違う」という言葉は、相手を仲間はずれにするなど人を傷つけるような否定的な意味が伝わることがあることを、児童生徒に気付かせたい。
	3. 日本語が間違っていても、笑うのはやめよう ペアワーク② 笑われた時の気持ちを想像しよう！ ・冊子 p.15 のそれぞれの登場人物の言葉から、「日本語を話している時に日本人に笑われた」時の気持ちを理解する。 ・冊子 p.15 のマンガから、一生懸命勉強した外国語を話した時に、相手に笑われるとどんな気持ちになるかを考え、ペアで話し合う。	・それぞれの登場人物の言葉を理解しやすいように、人物について補足説明する。
	4. 外国につながる人の多くは、言語能力がすごい！ ペアワーク③ 外国につながる人はいくつの言語を使っているだろうか？ ・冊子 p.16 のマンガを読み、内容を理解する。 ・複数の言語を使うことについて、ペアで話し合う。	・自分ごととしてとらえられるように、将来自分はいくつの言語を使いたいか、どの国で何のために使いたいかなど、児童生徒の様子を見ながら考えさせる。
まとめ 5 分	5. 本日の振り返り ・冊子の振り返り欄に記入する。 ・今回の授業に参加して、驚いたことや疑問に思ったことを各自で記述する。	・授業後に各自の振り返り内容を、クラス掲示などで共有する。

5章：身近な多文化共生を探そう

1　テーマ（キーワード）

やさしい日本語、共通言語、第一言語、母語

2　テーマの背景

・多言語化された情報を見た時に、それらがどのように多文化共生社会につながるかを意識することが大切だと考えられる。身近な例を挙げて、生活レベルにおいて様々な場所で多文化共生社会を目視できることを児童生徒に気付いてもらうために、このテーマを取り上げた。

3　留意点

・宗教と食習慣の関係や食物アレルギーについては、相互理解のために必要な知識として理解させるとともに、プライバシーにもかかわるものとして、学級の児童生徒の状況を踏まえて扱いたい。また、大須商店街は多文化共生を実践する地域の一例として扱い、自分の地元での手がかり探しへの関心を高めたい。

4　ねらい

・多文化共生の手がかりとして、宗教上の食習慣及び食物アレルギーへの対応方法や、日常的な情報の多言語化があることを理解する。

・大須商店街は、外国人も、商店街のイベントや地域の伝統行事などを日本人と一緒に企画・運営していることを知り、他の多文化共生につながる取組についても情報を集めて、その意義を考えることができるようにする。

・自分の地元で多文化共生の手がかりを探すことができるようにする。

5　評価の観点・評価規準

① 知識・技能	② 思考力・判断力・表現力など	③ 学びに向かう力・人間性など
・多文化共生の手がかりとして、宗教上の食習慣及び食物アレルギーへの対応方法や、日常的な情報の多言語化があることを理解する。	・大須商店街や自分の地元で、多文化共生の手がかりを探すことができる。	・自分の地元で、多文化共生の手がかりを探すことに意欲的である。

6　評価方法

・教材冊子への記入状況、グループワークの様子や振り返りから、評価の観点にそって評価する。

7　教材・教具

・教材冊子

8　授業展開（1時間で行う例）

時間	児童生徒の学習活動	教師の指導上の留意点
導入 15分	1. アンテナを張れば多文化共生の手がかりがたくさん見つかる！(生活情報編) ・冊子 p.17 の文章及び図表から、多文化共生の手がかりの例として、日常的な生活情報の多言語化があることを読み取る。 ・地元の自治体のごみの出し方の案内をタブレット端末で検索して、どのような言語の表示があるかを調べる。	・地元の自治体のごみの出し方の案内や銀行の ATM 画面については、教師がスライド画像を用意しておいて、共通のものを見て考えさせることもできる。
	2. アンテナを張れば多文化共生の手がかりがたくさん見つかる！(食品編) ・冊子 p.18 の文章及び図表から、多文化共生の手がかりの例として、宗教上の食習慣及び食物アレルギーへの対応方法があることを読み取る。	・食品原材料のピクトグラムやハラールマークは、実物があれば示すとよい。
展開 25分	3. 大須商店街を探検しよう グループワーク① ・大須商店街にはどのような食品があるでしょうか？ ・大須商店街ではどのようなイベントが行われているでしょうか？ ・冊子 p.19 の場面イラストを基に、大須商店街にはどのような食品があるかをグループで考える。その後、タブレット端末で、大須商店街の情報を検索して調査する。 ・大須商店街ではどのようなイベントが行われているかを調査し、グループで結果をまとめる。	・グループで考えたことをクラスで共有できるようにする。
	4. チャレンジ グループワーク② 自分の地元で、多文化共生の手がかりを探そう！ ・冊子 p.20 の表の項目について、地元にどのようなものがあるか、グループで意見を出し合う。	・この章を複数回の授業で実施する場合、グループで計画を立てさせたうえで、週末等に地元の現地調査を行わせ、結果をまとめて報告させたい。
まとめ 5分	5. 本日の振り返り ・今回の授業に参加して、驚いたことや疑問に思ったことを各自で記述する。	・授業後に各自の振り返り内容を、クラス掲示などで共有する。

6章：色々な人と仲良くしよう

1　テーマ（キーワード）

声かけ、ことばかけ、きっかけづくり

2　テーマの背景

・多文化共生が成功するためには、様々なバックグラウンドを持つ人が、仲良く社会づくりに取り組むことが大切である。教材の最後のテーマとして、「仲良くなるためにはどうすればいい？」という疑問に対して、児童生徒にいくつかの手がかりを与えることを目標にこのテーマを選んだ。

3　留意点

・学級によっては、実際に本人や家族が来日した時に困ったり、助けられたりした経験がある児童生徒がいる場合がある。そのような児童生徒に配慮することを前提として、実際の経験を聞き取っておき、学級で共有することが考えられる。身近なこととして学級内の関係づくりにもつなげたい。

4　ねらい

・外国につながる人が日本で困った経験をしていることを理解し、その時の気持ちを想像できるようにする。

・人と仲良くなるためのきっかけづくりについて、様々な状況と照らして、どのようなことができるか考えられるようにする。

・多文化共生社会について、これまでの学びを基に、自分ごとして考えられるようにする。

5　評価の観点・評価規準

① 知識・技能	② 思考力・判断力・表現力など	③ 学びに向かう力・人間性など
・外国につながる人が日本で困った経験をしていることを理解し、その時の気持ちを想像できる	・人と仲良くなるためのきっかけづくりについて、どのようなことができるか考え、意見交換できる。	・多文化共生社会について、これまでの学びを基に、自分ごとして考えることができる。

6　評価方法

・教材冊子への記入状況、ペアワークの様子や振り返りから、評価の観点にそって評価する。

7　教材・教具

・教材冊子、タブレット端末

8　授業展開（1時間で行う例）

時間	児童生徒の学習活動	教師の指導上の留意点
導入 10分	1. 困った時に声をかけてくれた人のことは決して忘れない ・冊子 p.21 のマンガを読み、多くの外国につながる人たちが、「初めて日本で優しくしてくれた人」のことをはっきり覚えていることを理解する。 ・外国につながる人が、日本に来たばかりの時に困ることはないか考える。	・各自の考えを学級で共有する。
展開 30分	2. 友達になるには、色々なきっかけがある ペアワーク① 友達になるにはどんな「きっかけ」があるでしょうか？ ・自分がクラスで誰かと初めて友達になった「きっかけ」を思い出し、ペアで伝え合う。 ・冊子 p.22 のマンガを読み、かおりさんが友達をつくったきっかけは何か、ペアで考えを伝え合う。 ・自分が友達をつくろうと思ったらどうするか考え、ペアで話し合う。	・ペアで話し合ったことをクラスで共有できるようにする。
	3. きっかけを作ろう！ ペアワーク② 仲良くなった「きっかけ」を探ろう！ ・冊子 p.23 の表の会話から、どのようにきっかけを作ったかを考え、ペアで話し合う。	・冊子 p.23 の表の回答例: 「相手のできることを褒める」(みずもの例)、 「一緒にできる活動を提案する」(そんさんの例)、 「困っていることを想像し、気を利かせて声を掛ける」(マキコ、ピアの例)、 「相手の文化に興味を示す」(ラクシャの例) ・ペアで話し合ったことをクラスで共有し、意見交換できるようにする。
まとめ 5分	4. 振り返ってみよう ・冊子の振り返り欄に記入する。 ・今回までの授業に参加して、驚いたことや疑問に思ったことを各自で記述する。	・授業後に各自の振り返り内容を、クラス掲示などで共有する。

◆「評価の観点・評価規準」一覧

	① 知識・技能	② 思考力・判断力・表現力など	③ 学びに向かう力・人間性など
1章	・自分たちが「当たり前」と感じている文化が当たり前ではないことに気付き、世界には多様な文化背景があることを理解する。	・異なる文化背景を持つ人々が共に暮らし、交流する多文化共生社会を築くために必要なことを考え、提案できる。	・学級の児童生徒と共に意欲的にこれからの多文化共生社会のあり方を考えようとしている。
2章	・「移住」の意味を知り、過去と現在の日本との関わりを理解している。	・移住の目的や移住する人の気持ちを想像して考えることができる。	・学級の児童生徒と共に「移住」について共感的に理解しようとしている。
3章	・自分が考える「食文化」とは異なる「食文化」があることを理解している。 ・身近な地域にある多文化の料理店や食材店を検索して情報を得ることができる。	・外国につながる人の故郷の料理の食材や調理方法を基に、実際に調理を体験し、多文化の食事を楽しむことができる。	・学級の児童生徒と共に、多文化の食事の様子を見た時に、相手の立場になって反応することの大切さを考えている。
4章	・「やさしい日本語」の使い方を理解し、表現を工夫することができる。	・「違う」という言葉の伝わり方と相手に与える影響を知り、適切な表現方法を考えることができる。	・外国につながる人と適切なコミュニケーションを図るために、日本語を話す時に工夫しようとしている。
5章	・多文化共生の手がかりとして、宗教上の食習慣及び食物アレルギーへの対応方法や、日常的な情報の多言語化があることを理解する。	・大須商店街や自分の地元で、多文化共生の手がかりを探すことができる。	・自分の地元で、多文化共生の手がかりを探すことに意欲的である。
6章	・外国につながる人が日本で困った経験をしていることを理解し、その時の気持ちを想像できる	・人と仲良くなるためのきっかけづくりについて、どのようなことができるか考え、意見交換できる。	・多文化共生社会について、これまでの学びを基に、自分ごとして考えることができる。

◆評価方法

・教材冊子への記入状況、ペアワークなどの児童生徒の様子や振り返りから、評価の観点にそって評価する。

みんなでつくろう
多文化共生社会

みんなでつくろう多文化共生社会
2023年３月
発行：愛知県県民文化局県民生活部社会活動推進課多文化共生推進室
〒460-8501　名古屋市中区三の丸三丁目１番２号
電話：052-954-6138（ダイヤルイン）
執筆・編集：日本福祉大学 国際福祉開発学部
教材等は、あいち多文化共生ネットからダウンロードできます。
愛知県　日本福祉大学
あいち多文化共生ネット　Facebook
この冊子は、一般財団法人自治体国際化協会の助成を受けて作成されました。
一般財団法人 自治体国際化協会